NISE RESEARCH SNAPSHOT No.53 2010年06月

小・中学校等における発達障害のある子どもの教科教育等の支援にどのように取り組むか？

【研究の背景・趣旨】

ＬＤ，ＡＤＨＤ，高機能自閉症などの発達障害のある子どもは，その認知特性や注意の問題，行動面の特徴などから，通常の学級における教科学習等において困難が見られることが少なくありません。失敗経験や不安の多い環境では，学習意欲は低下します。学習への不全感は自己評価の低下を招き，さまざまな二次的障害による不適応の原因につながる場合も見られます。何をどのように取り組めばよいのか具体的に示す，ねらいや活動を事前に示し見通しを持たせる，聞く・話す・書く・考えるなどの活動を区切る，話の聞き方や発言の仕方等のルールを決める，扱いやすい教材・教具を準備する等の支援が重要となってきます。また，学校は集団生活の場です。多くの子どもたちが様々な活動を行っており，発達障害のある子どもにはとても刺激が多い環境でもあります。発達障害のある子どもが通常の学級において，落ち着いてそして安心して学習に取り組めるようにするためには，どのような支援を考えればよいのでしょうか。

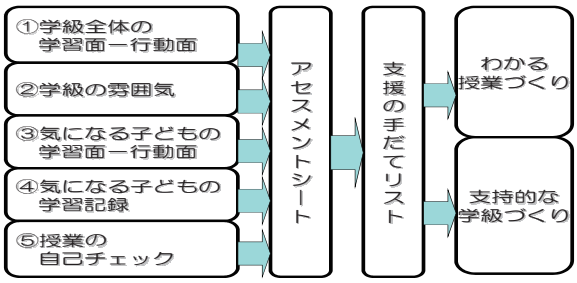
通常の学級において，発達障害のある子どもへの個別的な配慮や支援を行うためには，落ち着いて学ぶことができる学級集団の在り方も含めて考える必要があります。学級全体が落ち着いて学ぶことができる学習環境であれば，どの子どもにとっても学びやすい学習環境ということになります。そのためには，わかりやすい授業づくりと認め合い支え合う学級づくりが大切です。学級全体へのわかりやすい支援の工夫が，発達障害のある子どもにとってもわかりやすい支援になり，また，発達障害のある子どもへの個別的な支援が，学級全体へのていねいな支援になると考えられることから通常の学級における授業づくりと学級づくりは特別支援教育の大きな基盤になると考えられます。

【研究の目的】

本研究では，小・中学校等における発達障害のある子どもの通常の学級における教科教育等の支援の在り方について研究を行いました。特別支援教育について知識・技量のある教員による特別な指導ではなく，より多くの教員が日常の授業や学級経営の中で，大きな負担感なく支援に取り組むことができることに重点を置いています。教員の自己チェックにより，わかりやすい授業づくり，認め合い支え合う学級づくりを行う支援ツール（学級サポートプラン）を教育現場に提供することを目的としています。作成に当たっては以下の点を考慮しました。(a)ユニバーサルな支援を見つけられるツールにする。(b)全体を見る視点と個を見る視点の両面を大切にする。(c)教師自身のふりかえりにより授業改善が可能になるような手がかりを示す。(d)教師の多忙感に配慮しできるだけ負担感なく簡便に実施できるものにする。

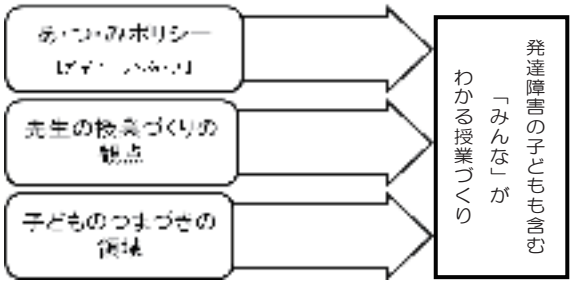
【研究の結果】　２種類の学級サポートプラン

学級サポートプランⅠ



５つのチェックをアセスメントシートに整理することで，支援のポイントが見つかります。支援の手だてリストを参考にして，授業づくり，学級づくりの具体的な支援内容を考えていくことができます。

学級サポートプランⅡ（あ・つ・みプラン）



「あ・つ・みポリシー（授業づくりのあり方）」「先生の授業づくりの観点」「子どものつまずきの領域」の３つを柱に，授業づくりについて考え，チェック用紙をチェックしていくと，具体的な支援の方策を見出すことができるようになっています。

【研究の成果・活用】

学級サポートプランは，教員の自己チェックにより，できるだけ簡便にそして負担感なく，わかる授業づくりや学級づくりを行うための支援ツールです。「計画(Plan) → 実践(Do) → 評価(Check) → 改善(Action)」に従い，効果的な支援を実施していくためのプロセスを援助するものとして考えています。

○ **学級全体への支援の視点**

学習面－行動面のチェックは，学級の子ども全員に実施します。はじめはやや負担感を感じても，一人一人をていねいに見とることで，課題が目立つ子どもだけでなく，日頃あまり意識していなかった子どもへの気づきも促すことにつながります。

○ **データとして見えるシート**

学校でも様々なチェックリストが利用されていますが，情報量が多いほど整理に時間がかかります。学級サポートプランでは，情報をまとめ，支援の方向性をある程度決めていくために，チェックの結果が客観的なデータとしてシートにグラフ表示できるようにしています。

○ **教師による自己チェック**

教師の自己チェックによる取組は，評価(Check)→改善(Action)はしやすい面がありますが，客観性に欠ける面もあります。客観性を高めるためには，校内委員会のメンバー等、複数の目で時間をかけて見直すことも望まれます。

○ **わかる授業づくり**

授業の自己チェックは，自分の指導を客観的に見る指標となります。授業研究の機会等を利用して，お互いにチェックすることは授業評価にもなり，授業改善や指導力を高め合うという学校全体での取組への意識の向上にもつなげることができます。

○ **アセスメントから具体的な支援へ**

教育現場では即効性のある具体的な支援内容が求められていますが，アセスメントをどう具体的な支援に活かすかが大切です。なぜそのような支援が必要なのか，その理由や根拠が見えてくると，支援の目的がわかり，支援内容にも工夫がしやすくなります。

【関連情報】

Universal design for learning guidelines
(学びのユニバーサルデザインガイドライン)

Ⅰ. Provide Multiple Means of Representation
(多様な提示方法の利用)

Perception（認識）
Language and symbols（言語とシンボル）
Comprehension（理解）

Ⅱ. Provide Multiple Means of Action and Expression
(多様な表現方法の利用)

Physical action（身体的活動）
Expressive skills and fluency（表現技能と流暢さ）
Executive function（実行機能）

Ⅲ. Provide Multiple Means of Engagement
(多様な参加の方法の利用)

Recruiting interest（興味を引く）
Sustaining effort and persistence（努力と根気の持続）
Self-regulation（自己調整）

CAST（Center for Applied Special Technology）2008

本リーフレットは，研究所で行った次の研究を基に作成しています。

【研究課題名（研究期間）】

重点推進研究
「小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究」
(平成20～21年度)

【研究組織／問い合わせ先】

・研究代表者
笹森洋樹／sasamori@nise.go.jp

・研究分担者

久保山茂樹	渥美義賢	梅田真理
大城政之	海津亜希子	伊藤由美
廣瀬由美子	玉木宗久	涌井　恵
藤井茂樹	小林倫代	小松幸恵

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（National Institute of Special Needs Education; NISE）
〒239-8585　神奈川県横須賀市野比5-1-1 TEL:046-839-6803 URL:http://www.nise.go.jp/